

中国語新聞の紙面編集の史的考察（下）

馬 挺*

前書き 中国語新聞の史的区切りについて

第一節 中国語新聞の萌芽期の紙面（?）十九世紀初期）

- 一、古代新聞の紙面について
- 二、『京報』について
- 三、萌芽期の新聞の紙面構成についてのまとめ

第二節 中国語新聞の成立期の紙面（一八一五年～一八七四年）

- 一、最初の近代型中国語新聞『察世俗每月統記傳』（一八一五～一八二一年）
- 二、後継紙とその他
- 三、近代型新聞紙紙面構成を採用した最初的新聞紙

四、中国語新聞の成立期における紙面構成についてのまとめ

（以上「上」）

第三節 中国語新聞の発展期の紙面（一八七〇年代後半～一九五〇年代前半）

——『申報』を中心としての検証

- 一、『申報』の概要
- 二、『申報』の編集方針と紙面構成
- 三、その他の新聞の紙面と発展期についてのまとめ

第四節 中国語新聞の充実期の紙面（一九五六年以降）

——『人民日報』を例として

- 一、『人民日報』の概略
 - 二、一九五六年の紙面刷新について
 - 三、文化大革命の期間
 - 四、『人民日報』の紙面についてのまとめ
- 後書き 中国語新聞の紙面構成における二大源流の融合について

第三節 中国語新聞の発展期の紙面

(一八七〇年代後半～一九五〇年代前半)

——『申報』を中心としての検証

一八七四年に創刊された『循環日報』は中国人によって創立され成功した最初の中国語の新聞である。よって中国語の新聞の成立期から、発展期に入ると考えることができる。そして、十九世紀後半から七十年間ほどの二十世紀の前半に至ると、中国の新聞はすでに現代型の新聞になる。発展期はここをもって区切ることにする。

萌芽期と成立期における検証においては、外国人によって創刊された新聞が多かったので、区別するために特に「中国語新聞」と強調してきたが、発展期になると、中国語の新聞が主流になっているため、以下必要な場合を除いて「中国新聞」と呼ぶことにする。

発展期において存在していた中国の新聞は数え切れないほどである。

『中国近代報刊名録』によると一八七五年から一九一一年までだけでも千七百点以上の新聞雑誌の名前が列挙されており、その中の大部分は新聞とみられる刊行物である。中国新聞の紙面構成を考察するために、これらの新聞を全部考察することはほとんど不可能であり、またそうする必要もないであろう。

本節においては、中国の新聞史上最も長い歴史をもち、発展期のほぼ始めから終わりまでを占め、影響力が非常に大きかった新聞紙の『申報』を取り上げて、それを軸にして、その他の紙面構成に大きな意義をもつ新聞を加えて検証しようと思う。

一、『申報』の概要

(一) 創立の背景

一八四二年中英「南京条約」を初めとして、一八六〇年中露「北京条約」に至るまで、清政府は英・米・仏・露の列強と一連の不平等条約を結ぶことを余儀なくされた。中国の門戸は大きく開かれて、半植民地化へと進むと同時に、各港における商業活動が活発になっていった。さらに一八七〇年代から一八九〇年の間、在華の外国人による新聞の発行の数量と場所が一層発展し、商業情報紙と政論新聞の正式な登場によって、外国人による在華の新聞の創立活動はピークに達した。『申報』の登場はそのピークの前触れであった。

(二) 創立者と目的

『申報』は一八七二年四月三十日にイギリス人事業家のメジャー(Ernest Major 中国語名：美查 一八三二—一九〇八)により創立された。「申」という字は歴史上の人物に由来する上海の代称であり、『申報』とは『申江新報』の省略で、「申江」は地元を表わし、「新報」というのは、同時期の新聞が「邸報」や『京報』のような古い「報」と区別するために用いた一般的な呼び方である。

『申報』初めは隔日刊で、第五号(一八七二年五月七日)から日刊(日曜除く)になった。メジャーは『申報』を中国人が読める新聞にすることを決意し、従来の外資系新聞と違って、外国人の宣教師による編集者ではなく、中国のことをよく知っている中国人の知識人を招いて「主筆」や編集者に委任していた。初代総主筆は蔣芷湘で、後に一八八

四年に科挙で「進士」に及第して、『申報』から離れたという。⁽⁷⁵⁾

実はメジャーは貿易で損をしたため、新聞業・印刷業に投資し、利益を得るのが『申報』を作る本来の目的であった。最初、メジャーは「新聞者真可便民而有益於国家者也（新聞というのは、庶民に便利を与え、国に利益になる）」（『申報』一八七二年五月四日『論申江新報緣起』）と述べ、中国人と中国のためという創刊の目的を打ち出したが、三年後、ついに新聞の経営によって営利を計ることが本当の目的であることを明らかにした（『申報』一八七五年十月十一日『論本報作報本意』）。中国人による編集も、営利の目的を達成するの一つの経営手段だったとも伺える。

（三）『申報』の経営方法

『申報』の創立より十年ほど前に、『上海新報』がすでに創立して、大きな影響力をもつ新聞紙になっていたので、『申報』は初めから、『上海新報』を競争相手とみなして、いろいろな経営上の戦略を目論んだ。

まず、創刊してまもなく日刊紙にし、また『上海新報』の価格三十文に対して、価格を八文にまで抑え、上海だけではなく、杭州、南京、漢口、天津などで、販売を進めた。

『上海新報』も『申報』の創刊後すぐ日刊紙に変わり、値下げし、内容を刷新したが、コストが高くて、損失が多かったので、『申報』に敗れて、ついに一八七二年に廃刊になった。『申報』は一八八二年の『字林滬報』の登場まで、中国の日刊紙として独占状態を維持した。⁽⁷⁶⁾

発行部数は最初六百部であったが、四年後には二千部に、一九一九年には三万部くらいになり、資本金も創刊時の千六百両（白銀）から、一九一二年には一万二千圓（銀圓）になった。⁽⁷⁷⁾メジャーは一八九九年に帰

国するとき、すでに三十万両の資金をもつ大金持ちになり、営利の目的は果たしたのである。

『申報』は一九〇七年に七万五千圓（銀圓）で中国人の席子佩に売られ、以来、『申報』は名実とも中国人の新聞紙になった。

二、『申報』の編集方針と紙面構成

（一）編集方針について

『申報』は積極的に販売戦略を推進するとともに、萌芽期、成立期において形成された中国語新聞の伝統的編集方針を大きく改革していった。まず、中国語新聞として『申報』は初めてニュース、論評、文芸副刊と広告という四つの基本要素を一つの新聞にそろえた。

『申報』はニュースと論評を非常に重視し、これを最優先にして、できるだけ「邸報」との区別をはっきりさせ、大量の国内外のニュースを掲載し、またニュースの速報性にも注意を払っていた。一八八二年一月十六日に『申報』は開通したばかりの天津上海間の電報線を利用して、清の朝廷の諭旨を直ちに電送させて掲載した。これは中国新聞史上最初の電信記事である。中国新聞史上最初の「号外」も『申報』によるものであった。⁽⁷⁸⁾

論評については、創刊から基本的に毎日一つ、時には二つの論説を載せ、内容は鉄道建設から地球に関する科学知識に至り、纏足反対の論説もあった。⁽⁷⁹⁾

「副刊」、つまり詩文、絵、随筆などの内容を主とする文芸的紙面の存在は中国新聞の一つの独特な伝統で、その濫觴は『申報』の創刊から始まった詩文の掲載であるといわれ、一九一一年八月二十四日から登場し

た『自由談』副刊は当時最も人気がある副刊であった。⁽⁸⁰⁾

広告について、『申報』では相当な紙面を占めており、内容もさまざまである。創刊号の八面の中でも二面半くらいの紙面は広告と貿易の相場情報であった。

『申報』以前の新聞は、宣教師によるものが論説文を主とし、商人によるものはニュースを重視していたが、『申報』は営利が目的であり、売り上げと広告料が主な財源なので、読者のさまざまな好みに注意して販売を拡大し、広告主を確保しなければならなかった。そのために読者が関心をもつ内容をできるだけ載せることになり、上述の四つの要素を紙面に採り入れることになっていったのである。

(二) 『申報』の紙面構成

『申報』は創刊以来、独特な紙面を採用し(図版一〇)、一章(即ち一面)の高さは十インチで、幅は九インチであり、毛太紙(竹紙といわれるものもある⁽⁸¹⁾)で活版印刷である。当時は一日八章で、一枚の紙に折れるように印刷されていたようである。⁽⁸²⁾

創刊号の一面をみると、上の真ん中に「申報」というタイトルがあり、右は西暦の日付で、左は西暦の日付と号数である。第二号から西暦日付をやめたが、その理由は当時の読者はまだ西暦をあまり知らなかったからというものである。

各面の内容と紙面の割り付けは以下のとおりである。

一章：本館告白、本館条例。無欄無段、縦書き二十六行三十四字である。

二章：本館条例の続き、ニュース『馳馬角勝』(競馬)。無欄無段、縦書き二十六行四十一字である。

三章：外埠ニュース『完人夫婦得善報』と香港新報抜粋。割り付けは二章と同じである。

四章：香港新報抜粋の続きと『京報』の内容の転載。割り付けは同上である。

五章：『京報』を転載。割り付けは同上である。

六章：左右に分けて、右は『京報』、左は広告四つ。横に幅不等の四段に割り付けられている。

七章：全面広告。左右に分けて、それぞれ幅不等の四段と五段に割り付けられている。

八章：貨物相場と船期情報で、真ん中から横に上下二つに割り付けられている。

文句には句読点も傍線もつけていないし、見出しの字は本文と同じ大きさで、一行しか占めていない。

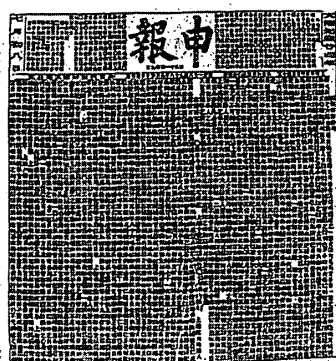
このような紙面の割り付けは、独特とは言えるが、同時期の『上海新報』の紙面より読みにくいことは否定できない。

しかし、七十年の歴史の中で、『申報』は何度も紙面の改革を行った。まず、一八七四年九月十日から一八八二年まで、三回にわたって行数と字数を増やし、五十四行五十六字になったが、実のところはただ行と行の間隔がせばまって、一層読みにくくなっただけであったと思われる(図版一一)。

意義がある紙面の割り付けの刷新は一九〇五年二月七日(旧暦正月四日)から、紙面を一枚八章から二枚十六章ないし三枚二十四章に増やすと同時に、「本館整頓報務舉例」によると紙面を「上下横截、分列短行、文理易明、且省目力。別刊大字擇要標題、藉振精神、并醒眉目」したことである。つまり、一面は記事と記事の間に縦線を引き、二・三・四・



図版一一二『申報』
(1905年2月7日)



図版一一一『申報』
(清光緒廿四年七月八日
(1899年8月24日))



図版一一〇『申報』
(創刊号 [1872年4月30日])

(本稿『申報』の図版は全部日本国立国会図書館所蔵『申報』復刊版より)

五のニュース面は真ん中で横に双線を引き上下二つの部分に分ける(図版一一二)。その他の広告と相場の面にもやはり欄も段も「破欄」が現れた。

また見出しの活字も本文より大きくなっており、ニュースの類型もよりはっきり分けられて、電報ニュースは「專電」と、重要ニュースは「要聞」と名付たほか、その他に外埠ニュース、本埠ニュース、国外ニュースなどがあった。さらに、外交・政界・学界・軍界・実業・産業・官・民などの分野にわけて載せた。さらにまた一九〇七年七月二十日の『申報』は初めて写真を掲載した。三枚の六インチの写真で、内容は当時の革命派の志士徐錫麟が安徽巡撫の恩銘を刺殺したため、死刑を受ける直前の様子などである。同年四月に清政府の「立憲」意向を諷刺する政治漫画も連載という形で登場した。⁽⁸³⁾

カラー印刷の使用については、一八八二年二月二十三日(清光緒八年正月六日)旧正月の第一号の一面と二面は赤インクで印刷されて、「天官賜福」というの祝い絵が一面を占めた。また一八七五年(清同治十三年)一月二十五日は同治皇帝の死去を報じたために全紙面が青いインクで印刷された。

紙面の呼び方については、最初は、前述のように中国の文章の分け方にもとづいて面を「章」と呼び、後に「頁」に変わって、一九〇五年二月十三日から「版」と改称することとなり、中国新聞の紙面の慣用語になっている。

『申報』が新聞用紙を使用して両面印刷を始めたのは、一九〇九年一月二十五日⁽⁸⁴⁾で、実際に「独特」の紙面構成をやめて、西洋型の大判の紙面に変わるのが一九一二年一月十五日からであり、すでに清政府が倒れ、民国の元年になったところである。



図版 - 一四 『申報』の最終号 (1949年5月27日)



図版 - 一三 『申報』
(1912年1月15日)

この日の一面は『申報』のタイトルが右に入り、「紙面拡充」の特告の外は、ほとんど広告で、紙面構成は活発というより、むしろ乱雑という感じである(図版一三)。また一九四〇年二月二十九日の例をみれば、タイトル以外は広告ばかりで、三面からやっとニュースが掲載されている。実は、一九一五年以降、『申報』の広告が占める面積はニュースの面積を超えて、広告が主役になっていた。また「三面靠水(三方が水に面する)」と言われ、つまり広告が紙面の中央に居座り、ニュースを隅に押しやったというわけである。

(三) 『申報』の終焉とその紙面構成についてのまとめ

『申報』は七十七年の歴史を経て、中国共産党の解放軍による上海の解放とともに、一九四九年五月二十七日が最後の号になった。その日は一枚しか発行しなかったが、日付はまだ中華民国の年号であった。しかしその紙面はすでに現代型の新聞の紙面と変わらない(図版一四)。

上述した『申報』の紙面構成の流れの検証によって、次のようにまとめた。

『申報』の前期(一九一二年まで)の紙面は「独特」といわれていたが、それは伝統的冊子の紙面と現代新聞紙面の間の中間パターンと見ることが出来る。すなわち、営利の目的に従って、読者を確保するために中国人の好みに沿って、伝統を守ることに、新聞紙面の改革の要求することの間に、中間の道を開拓した結果である。この開拓の結果、『申報』の紙面のパターンが十九世紀の末まで、その時期の中国新聞紙の紙面の決まったパターンになった⁽⁸⁵⁾。しかし、営利追求を背景にする競争の激化にともなう、ついに歴史の流れに沿わなければならなくなり、現代型の紙面に変わることになるのである。

とはいえ、『申報』の編集者は紙面の改革について完全に受け身の姿勢であったわけではない。一九〇五年の紙面刷新する際、趣旨が公表された「本館整頓報務舉例」(前文参照)によると、紙面の構成を改良することに、「且省目力」「藉振精神、并醒眉目」と述べている。すなわち、紙面が読者の「目にやさしく」、「元氣を出させて、(記事の)「筋道をはっきりさせる」ことである。読者心理の角度から見れば、読者の視覚心理を重視し、紙面が読みやすくなるように割り付け、読者の注意を起こさせるように見出しを大きくするという認識を前提として、紙面の改良を行った。成立期と比べると、はっきりした意識的な編集行為であることはみることができよう。

三、その他の新聞の紙面及び発展期についてのまとめ

『申報』の紙面構成の流れは、発展期の中国新聞の代表格であるとはいえないが、一つの象徴とはいえよう。

実際に、成立期における中国新聞はよりふさわしい紙面構成を形成させようとして様々な試みしていた。日刊紙にしばって紙面構成の例を次に取り上げよう。

その一、まだ『京報』の形式にのっとり、『京報』報房に頼んで木の活字で印刷し、無料で配布していた『中外紀聞』⁽⁸⁶⁾があり、一八九五年一月十六日に強学会より創刊された。

その二、冊子の形を保っていた『中華報』。一九〇四年十二月七日に北京において創刊され、毎日一冊で八葉十六頁で、内容は『京報』の内容に若干ニュースを加えていたという⁽⁸⁷⁾。

その三、『申報』の前期の紙面にのっとた『廣報』。一八八六年六月二

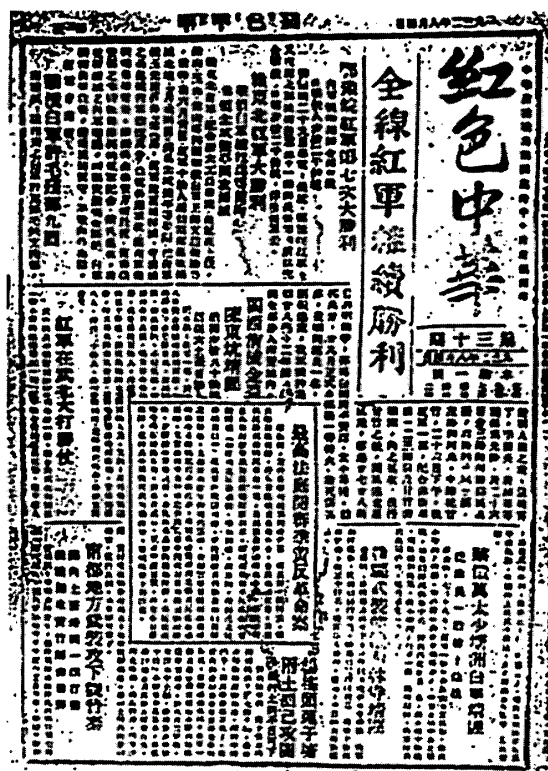
四日に広州で中国人により作られた早期の日刊紙である。また『新聞報』は一八九三年二月十七日に上海で創刊され、のち『申報』の競争相手になって、商業界に広い影響を及ぼした著名な新聞である。

その四、『申報』のパターンを捨てて、西洋型紙面を採用していた『時務日報』。一八九八年五月五日に上海で創刊した当時の維新派の新聞紙であり、タブロイド判で、紙面を横に均等の四つの段に割り付ける⁽⁸⁸⁾。また、一九〇〇年一月二十五日に香港で創刊された清末資本階級革命派(孫文)の最初の機関紙『中国日報』はタブロイド判である。その紙面は「日本報式」といわれ⁽⁸⁹⁾、その写しを見ると、タイトル部分を除いて、横に四つの段に分けられ、『時務日報』の割り付けとあまり変わらないと思う。

発展期の後期になると、新聞紙はほとんど縦書きで、紙面を横にいくつかの段に分けるという紙面の割り付けになっている。

例えば、一九二七年三月二十二日に漢口で創刊された『中央日報』(後に上海を経て、一九二九年二月一日に南京に移り、国民党の中央機関紙になった)(図版一五)、一九三一年十二月十一日に江西の瑞金で創刊された初の中国共産党臨時中央政府の機関紙『紅色中華』⁽⁹⁰⁾(図版一六)、抗日戦争期間に中国共産党が国民党の統治区の重慶で発行していた著名な『新華日報』(一九三八年一月十一日に創刊)、そして、同じ抗日戦争期間にほとんど封鎖されていた中国共産党の根拠地の延安で創刊した共産党の中央機関紙『解放日報』の紙面も、ほぼ同じ構成であった。

長期にわたった模索で、中国の現代型の紙面構成がようやく固定されているのである。



図版 - 一六 『紅色中華』
(『中国現代出版史料・丁編』より)



図版 - 一五 『南京中央日報』
(會虛白『中国新聞史』より)

第四節 中国語新聞の充実期の紙面（一九五六年以降）

——『人民日報』を例として

一九四九年に中国共産党は台湾を除く中国の大陸部分を基本的に制圧し、十月一日に北京で中華人民共和国の成立を宣告した。国民党の南京政府は台湾に移され、国民党の機関紙である『中央日報』は一九四九年三月十二日にすでに台北で発行が始まり、南京の『中央日報』は南京が解放されるまで「分版」として発行が続いた。⁽⁹⁾

中国共産党の『人民日報』が一九四八年八月一日に中央委員会の機関紙に变身したことを始めとして、戦争中の共産党系の新聞がそれぞれ各地方の共産党委員会と政府の機関紙に変わった。例えば、『解放日報』は共産党華東局と上海市委員会の機関紙に变身し、『新華日報』は南京市共産党委員会の機関紙として再建された。一方国民党統治の下で民営各紙が改造、合併、廃刊させられることもあった。例えば、『新聞報』が改造を経て『新聞日報』として続き、一九四七年五月に休刊していた『文匯報』が復活したことなどである。一九五〇年代の前半までに、大陸において共産党の各レベルの機関紙が絶対的優勢を占める新聞発行システムが完成した。しかし、当時の新聞の編集方針は（旧）ソ連の新聞のやり方を真似するばかりであった。⁽⁹²⁾

一九五六年に『人民日報』をはじめとして、紙面刷新の改革を行い、（旧）ソ連の新聞にならった編集方針を大幅に見直し、新時代の中国新聞の紙面構成を模索し始め、比較的安定した時期を迎える。この時点から、中国紙面刷新の充実期の開始と見るのが適当ではないかと考える。充実期における中国新聞の紙面について、『人民日報』を例として検

証しようと思う。その理由は『人民日報』が実に中国当代新聞の中で最も権威があり、紙面として最も代表性を備えているからである。本節では一応『人民日報』の概略と紙面に関するいくつかの重要な出来事を主に検証しようと思う。

一、『人民日報』の概略

『人民日報』は一九四六年に五月十五日に当時の晋冀魯豫（山西、河北、山東、河南）解放区と言われる地区の中国共産党軍隊の新聞として創刊され、一九四八年六月十五日に中国共産党中央委員会華北局の機関紙に転じ、一九四九年三月に平山から北平（北京）に移った。また一九四九年八月一日に中国共産党中央委員会の所屬となつて、同委員会の機関紙に变身したのである。

後に毎日八面で全国及び海外向けに発行され、発行部数は二百九十万部（一九八九年統計）と言われている。一九八五年七月一日から『人民日報・海外版』が発行されたが、これは華僑と外国に滞在する中国人及び外国人を対象としている。

ところで中国共産党の基本的理論として、報道宣伝機関は、まず党の「喉と舌」、すなわち代弁者として働くものとされている。すなわち一切の報道活動は党の指示と規制にもとづいて行われる。戦争時期や「文化大革命」の時期はもちろんで、改革開放政策が遂行されてからも、あまり変わらないのである。一九八〇年三月の中国共産党第十一期中央全会で採決された「党内の政治生活についての若干の準則」は、党内の言論規律についてこう規定している。「……新聞、放送のような公開された宣伝手段を通じて、中央の決定に反する言論発表をすることは絶対許さ

ない⁽⁹⁶⁾。また、改革の有力提唱者と言われ、自分の死が「民主化要求運動」のきっかけになった中国共産党元総書記胡耀邦は、一九八五年二月八日に発表した「党の新聞（宣伝報道）工作について」の発言の中で、報道宣伝の性格について、「一言で概括すると、私は党の新聞（報道宣伝）事業は党の代弁者であり、同時に人民自身の代弁者でもあるといえるのではないかと思う」と述べた。同氏はまた党の新聞（報道宣伝）を経済体制改革と同列に論じることが「不適切であると考える」と表明し、文芸界に認めている「創作の自由」をそのまま報道宣伝分野に持ち込める声について「簡単にそのまま持ち込めるのではない。……党の新聞（報道宣伝）事業は党と政府を代表して発言し、党の路線・政策に従って議論を発表して、業務を指導する。……党の新聞（報道宣伝）機関の主な言論、及び国内の業務と対外関係の主な報道は党と政府を代表するものであるべきで、ただ編集者・記者個人を代表するものではない」と指摘した。

中国共産党中央委員会の機関紙とされている『人民日報』は、「党報」そのものであることは間違いなく、かつ「党報」と言われる系列の新聞のトップの地位にある。共産党中央は『人民日報』を厳しく管理、指導しており、共産党一党指導体制を堅持している中国において、読者だけではなく、他の新聞にも絶大な影響力をもっていることは疑問の余地がない。

紙面について、『人民日報』の紙面は最も穩健で、記事の配置や見出しの言葉遣いとその活字の大きさ及び長さなどは当局の見解と意図を反映し、編集上のルールを守って、模範的紙面という地位にある。少しでも政治的な出来事があれば、各方面・地方の新聞は競って『人民日報』に電話をし、翌日の紙面の様子（例えば、トップニュースはどれにし、

メーン見出しの言葉遣いはどう書き、見出しの活字の字体と大きさと長さはどれぐらいか、など）を聞いて、それにそって本紙の紙面を作る。こうすれば政治的な間違いを犯すことにならないからである。このため昔の中国の新聞はみな同じ顔であった。

しかし、文化大革命の終焉に伴い、「新聞（報道）改革」の流れにおいて、共産党の伝統的新聞理論の是非が時として問われることになり、また、西側のジャーナリズムの理論が多少紹介されて、議論を呼んだ。しかしこのような動向はほとんど新聞界、学術界に限られ、根本的な変化はなかったが、中国のジャーナリストたちに影響を与えたことは否定できない。新聞紙面編集に関する理論も実践も変わりつつあり、各新聞が徐々にそれぞれの特徴をもって、編集部の見解を表すような紙面を作り始めた。

二、一九五六年の紙面刷新について

（一）早期の紙面

『人民日報』の早期の紙面を採することは比較的難しい。日本の国会図書館の所蔵は一九五三年十一月の分からであるが、創刊号については、人民日報自身も保存していないということである。

いまままでにわかった早期紙面の構成は『人民日報』に四十年以上勤めた、元の総編輯（総編集長）の李莊によれば、一九四九年からの紙面の概況は以下の通りである。大判の一枚四面にタブロイド判一枚四面を加える。大判では『人民日報』自身で、一面は国内外重要ニュース、二面は国内ニュースと経済ニュース、三面は国際ニュース、四面は各分野の専門紙面であり、タブロイド判の方は、「北平新聞」のタイトルで、一、

二面は北平（北京）ニュース、三面は「学習生活」四面は「人民園地」である。後者は同年八月十八日に廃止し、大判六面に改めて、四面を北平ニュースと経済ニュース、五面を各専門分野面（「旧」ソ連研究・経済・国際・衛生・農業生産・日曜文芸・論文など）、六面を「人民園地」とした。⁽⁹⁸⁾つまり、一つの地区に向けた新聞から全国向けの新聞に転換し、全国各地の動向を充分に報道しようとしたのである。

（二）（旧）ソ連に学ぶ

建国初期における、いかなる分野でも一方的に（旧）ソ連に学ぶという指導思想の下で、新聞の編集も例外ではなかった。「一切のことはプラウダに学ぶ」というのが当時の『人民日報』の方針であった。（旧）ソ連の新聞雑誌の文章記事の訳文が大量かつ無修正で『人民日報』の紙面を占めていた。とくに（旧）ソ連で大きな出来事があると、『人民日報』の全紙面はほとんど（旧）ソ連に関する記事になった。⁽⁹⁹⁾

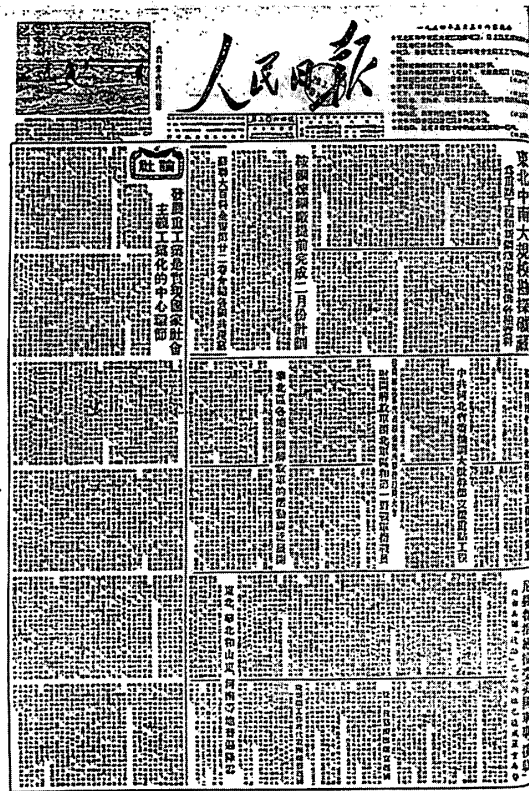
内容の丸写しだけではなく、紙面の構成までもそのまま模倣した。その時期の『人民日報』の紙面の割り付けはプラウダと同様活気なく、見出しもプラウダと同じく一行のものがほとんどであった（一九五四年三月三日の一面参照・図版一七）。一九五四年三月から、『人民日報』の内部発行物は毎週二回、プラウダの紙面の割り付けの様子を模写して掲載していたのである。⁽¹⁰⁰⁾

（三）一九五六年の紙面刷新

『人民日報』の当時の総編集長は中国の有能なジャーナリスト鄧拓で、彼は一九五五年に、これまでのやり方を改革しようという考えを示唆し、慎重な準備をして、一九五六年七月一日から『人民日報』の紙面を一新



図版 - 一八 『人民日報』
(1956年7月1日)



図版 - 一七 『人民日報』
(1954年3月3日)

(本稿の『人民日報』の図版は全部日本国立国会図書館所蔵より)

させた。その日の一面に社説『致読者』で、紙面刷新の願いと方法を訴えた。その要点として、報道範囲の拡大、自由討論の展開、文章の風格の改善などが挙げられたが、少しでも新聞の報道をジャーナリズムの原点に戻そうという努力が伺える。

紙面の割り付けは(図版一八)のようになっている。すでに横書きに変わって、それほど巧みとは思わないが、図版一七と比較すると、確かに活発になっていると感ぜられる。左側の二つの社説の配置は変化に乏しいが、右側の記事の配列と見出しの扱いには活発な動きが感じられる。紙面刷新後の『人民日報』は二枚八面に拡大した。各面の内容の割り当ては以下の通りである。

- 一面…重要ニュース
 - 二面…国内ニュースの工業と交通の分野
 - 三面…国内ニュースの農業と商業の分野
 - 四面…国内政治、共産党党内生活及び首都と地方のニュース
 - 五・六面…国際面
 - 七面…学術・文化
 - 八面…上部は文学的副刊、下部は広告
- 紙面の刷新とはいいいながら、実は報道編集方針の立て直しであったが、刷新後つぎのような情況に直面した。毛沢東の指導による全国的な経済発展の過熱化に対し、『人民日報』は反対の態度を示していたが、毛沢東の怒りを買って、厳しく注意され、一九五七年四月十三日から、『人民日報』の報道姿勢は再び一転した。四月二十二日から紙面の配列も変り、二・三面の経済ニュースが三・四面に移され、四面にあった国内政治の内容が二面に昇格したのである。
- また、同年五月から、指示にしたがって、「右派」を引き出す作戦を

行い、民主党派の共産党に対する意見を大量に掲載し、ついに六月八日の『人民日報』社説『這是為什麼？（これはなぜだ）』（図版一・一九）を開始の合図として、いわゆる「右派」を「一網打盡」にする運動が全国で始まった。

一九五六年の改革は中途半端に否定されて、編集方針はまた元の通りに戻されたが、紙面構成の改革そのものは、ある程度残された。

三、文化大革命の期間

「反右派」運動以降、「反右傾」（一九五八年）、四清（一九六四年）など政治運動が相次ぎ、ついに一九六六年に文化大革命の嵐を迎えた。

『人民日報』は党報として党の路線にしたがい、全国の宣伝機構及び読者に与える影響もますます大きくなっていった。文化大革命の際、共産党の指導部が異常な状態に発展するとともに、『人民日報』も内容から紙面構成まで一層異常になり、ついに四人組に掌握され、読者に徹底的に嫌悪されるものとなった。

（一）文化大革命当時の決まった紙面パターン

文化大革命の開始の信号は『人民日報』一九六六年六月一日社説『横扫一切牛鬼蛇神（えたいのしれない連中をすべて一掃）』だとみられている。その日の一面の割り付けは、上部から半分以上がこの社説で占められ、なおかつ通しカットの見出しで、「強勢」が極めて強くなっている。内容はともかく、見出しと紙面の配列だけでもすぐその強烈さは一目瞭然である（図版一・二〇）。実は、これと変わらない割り付けで、厳しい口調の社説が六月一日から何日間もつづけて掲載されて、そして、

このような紙面構成は十数年に渡る文化大革命の期間中に『人民日報』ないし中国の各新聞紙の決まったパターンになっていった。少しでも重要と見られる事があれば、（例えば、毛沢東の何かの指示が出る場合）すぐ通しカットの大型見出しを作り上げ、強力とみられる編集手段を一杯に使用した。読者の方がこのような紙面にだんだん慣れてしまい、いくらか強烈と思わそうとしても、読者は無関心な態度を取るようになったことも事実であった。

（二）一九七六年「天安門事件」の報道による教訓

文化大革命の末期の一九七六年一月八日に、指導部に残されたほぼ唯一の民衆に信頼されたメンバー周恩来総理が亡くなって、これをきっかけに北京の市民は自発的に天安門広場に集まって、周恩来を偲ぶ形で四人組の残酷な統治に対して抗議の声をあげた。また同年の四月に、故人を偲ぶ伝統的節気の清明節の前から、再び天安門広場で詩文、講演などの形で周恩来を追悼する活動を行うと同時に四人組を激しく非難した。しかし、四月五日の夜に四人組はついに警官と労働者民兵を動員し、広場の市民を武力で鎮圧して排除した。これが有名な一九七六年の「天安門事件」である。

その間、『人民日報』は市民の追悼、抗議について、一字も報道せず、四人組の意思にしたがって、全国人民の意向とは正反対のいろいろな文章や記事を大量に掲載していた。周恩来の追悼大会の前日の一月十四日の一面のトップで『大辯論帶來大変化（大辯論が大変化を起こした）』という文章を掲載して、実際には周恩来を暗に批判して、いわゆる「反右傾闘争」を呼びかけ、清明節（四月四日）の前には、四月三日の一面トップに『翻案復辟的自供状（巻き返しを狙う者の自供書）』という文



図版 - 二〇 『人民日报』
(1966年6月1日)



図版 - 一九 『人民日报』
(1957年6月8日)

その後発表された一連のは非善悪をさかさまにした記事、論説も含め、読者の反感をかった。四月八日の『人民日报』を破ったり、新聞に「党報が墮落した」「ファシスト党機関紙に改名しろ」と書いて、「編集者ゲッペルス」宛で送ったりした。

章を掲載して、周恩来の後継者と見られていた鄧小平をひどく非難した。また、鎮圧の翌日に社説『牢牢掌握闘争大方向(闘争の大方向をしっかりと掌握せよ)』を掲載して、階級闘争を強く強調していた。

さらにまた、四月八日に華国鋒の党中央第一副主席と総理の就任、鄧小平の完全な失脚を報じると同時に、四月五日の天安門広場での鎮圧について『天安門広場の反革命政治事件』という見出しで初めて報道し、抗議活動に参加した市民を「反革命分子」と呼んで、厳しく非難した(図版一三一)。



図版 - 二一 『人民日报』
(1976年4月8日)

これらの記事と紙面は『人民日報』の歴史に恥の一ページとして残されるときに、『人民日報』のジャーナリストたちを深く反省させた。十三年後の二回目の「天安門事件」、いわゆる「民主化要求運動」の際、『人民日報』が異なった姿勢を示した遠因の一つは一九七六年の教訓であったと思われる。

四、『人民日報』の紙面についてのまとめ

党報としての『人民日報』（中国のほとんどの新聞も同じ）の新聞紙面構成の変化は政治情勢との関係が非常に密接であり、より純粋な新聞編集論上の紙面分析はほぼ不可能である。一方、時宜性があまり重視されていないこと、広告が少なく広告スペースをあまり考慮する必要がないことなどのため、紙面の編集者はよりゆったりと紙面の構成を考えて作成することができ、『人民日報』を初めとして、各紙とも紙面構成に相当な注意を払い、ていねいに作ることが可能であった。長期に渡る政治の嵐の中でも、新聞の紙面構成のことはよく研究され、できるだけ完全なものにしようとしているのが事実である。これは充実期の中国新聞の一つの特徴かもしれないし、新聞の内容より紙面構成の方が成熟していると思われる一つの原因であるかもしれない。

後書き 中国新聞の紙面における二大源流の融合について

中国新聞の紙面は、『題奏事件』や「京報」のような冊子型と、『香港船頭貨價紙』のような近代型の二つ源流があるといえよう。いろいろ試行錯誤のうち、『申報』の時代に、西洋型の大判新聞の紙面する適応す

る中国語新聞の今の形がやっと出来上がった。これは実際、その二大源流の融合の過程でもあると考えている。そして日本の初期新聞の紙面構成との比較研究とともに今後の課題にしたい。

註

本稿は田村・和田両先生をはじめとして、関係者の方々による特別のご配慮で掲載することができたことは、「上」で述べたとおりであり、誠に感謝しているとともに、慶應義塾大学経済学部の駒形哲哉先生には忙しい中、ネイティブチェックを引き受けていただき、感謝の意を表します。

- (75) 『清末四十年申報史料』二四頁
- (76) 『中国新聞史（古近代部分）』一一一頁
- (77) 『中国近代報刊史』四三頁
- (78) 『清末四十年申報史料』八二頁参照
- (79) 同前二〇一二頁
- (80) 『簡明中国新聞史』一八三頁によると、正式の副刊の登場は一九〇〇年に日本人が創立した『同文滬報』の付属頁とも言われている。
- (81) 曾虛白『中国新聞史』一四二頁
- (82) 『中国新聞史（古近代部分）』一〇一頁
- (83) 同前一〇八頁
- (84) 『中国近代報刊名録』一二〇頁
- (85) 『中国新聞史』一四二頁参照
- (86) 『中外公報』とも呼ぶ。曾虛白『中国新聞史』九八頁（『中国近代報刊名録』七八頁は隔日刊と記載）
- (87) 『中国近代報刊名録』八四頁
- (88) 同前一八八頁
- (89) 同前二〇七頁
- (90) 『中国的報刊』二〇四頁
- (91) 同前一一九頁
- (92) 同前二六四頁
- (93) 安岡『人民日報回憶録』四一―四二頁
- (94) 李莊『人民日報回憶録』五〇頁

- (95) 近年、中国で全国紙だけでも、二百十二紙まで(二〇〇二年の統計による)増加し、競争は激しく、もはや共産党や政府系の新聞「一紙独占」の時代ではなくなった。それにしても、世界新聞協会の二〇〇三年統計によると、人民日報の発行部数は百八十六万部である。しかし、人民日報のHPで、現在人民日報社が発行している新聞は、本紙の『人民日報』とその『海外版』以外に『市場報』『華東新聞』『華南新聞』『京華新聞』『江南時報』『証券時報』と『國際金融報』を発行しており、その一八六万部の発行数が『人民日報』の数字であるかどうかについて、発表されていない。
- (96) 『十三届三中全会以来重要文献選讀・上冊』一六九頁
- (97) 同前・下冊八一五頁と八一六頁
- (98) 李莊『我在人民日報四十年』一〇〇頁
- (99) 王英秀『人民日報回憶錄』九六頁
- (100) 錢江『人民日報』一九五六年的改版・新聞研究資料』総四三・一頁、王英秀『人民日報回憶錄』九九頁
- (101) 「強勢」などの新聞紙面における編集的理論は、拙稿の『中国の新聞紙面研究についての考察(下)』(本紀要第十一回載(平成十五年三月二十五日発行))を参照のこと。
- (102) 拙稿『中国の新聞紙面についての一考察——一九八九年四月～六月の『人民日報』を中心に』を参照のこと。
- 参考文献(「上」に載った文献は省略する。)
- 中国語文献
- 方積根等『海外華文報刊の歴史と現状』(新華出版社・北京・一九八八年)
- 鄭貞銘『新聞採訪与編輯』(三民書店・台北・民国七九年「一九九〇年」)
- 鄭興東等『報紙編輯学・修訂版』(中国人民大学出版社・北京・一九八八年)
- 李莊『我在人民日報四十年』(人民日報出版社・北京・一九八二年)
- 人民日報報史編輯組編『人民日報回憶錄』(人民日報出版社・北京・一九八八年)
- 安崗『新聞論集』(天津人民出版社・天津・一九八二年)
- 徐載平等『清末四十年申報史料』(新華出版社・北京・一九八八年)
- 四川人民出版社『新華日報的回憶』(同社・成都・一九七九年)
- 韓辛茹『新華日報史』(重慶出版社・重慶・一九九〇年)
- 中国人民大学新聞系/黄河・張之華編著『中国人民軍隊報刊史』(解放軍出版社・一九八六年)
- 張静廬輯注『中国現代出版史料・丁編』(中華書局・北京・一九五九年)
- 徐培汀・譚啓泰編著『新聞心理学漫談』(新華出版社・北京・一九八八年)
- 鄭興東『試論版面語言』(『新聞学論集・第一輯』(中国人民大学新聞系同誌編輯組編・中国人民大学出版社・北京・一九八〇年))
- 同『版面編排与讀者心理』(同上誌・第七輯・一九八三年)
- 龍書玉『報紙版面中的綫条及其運用』(同上誌・第一二輯・一九八七年)
- 包慧『談報紙編輯工作的特性』(同上誌・第三輯・一九八一年)
- 劉建明『編写「中国現代新聞史」若干問題淺見』(同上誌・第三輯・一九八一年)
- 熊復『新華日報的歷史地位及其特点』(同上誌・總九輯・新華出版社・一九八一年)
- 黄河・張之華『中国工農紅軍報刊概貌』(同上誌・總一九輯・中国社会科学出版社・北京・一九八三年)
- 錢江『人民日報』一九五六年的改版』(同上誌・總四十三輯・中国社会科学出版社・一九八八年)
- 新聞研究所中国報刊史研究室『延安「解放日報史」大綱』(同上誌・總十七輯・中国社会科学出版社・一九八三年)
- 鮑燦『北京風波中部分報紙版面大事記(上)』(同上誌・總五十輯・中国社会科学出版社・一九九〇年)
- 王敬東・周鳳『早期「申報」業務創新拾零』(同上誌・總五十三輯・一九九一年)
- 王甫『報紙版面中的形及相互關係』(同上誌・總第九輯・一九八六年)
- 潘掌榮『論報紙版面形式』(同上誌・一九八七年四号)
- 叶春華『怎樣組織版面(上、下)』(『新聞大学』・第五、六期・上海復旦大学出版社・一九八三年)
- 同『試論報紙的編輯方針』(同上誌・第八期・一九八四年)
- 潘玉鵬『報紙版面和讀者心理』(同上誌・第九号・一九八五年)
- 俞月亭『論報紙編輯工作的特性』(同上誌・第十二号・一九八六年)
- 史履新『報紙版面合成及其風格』(同上誌・第十四号・一九八七年)
- 孫玉華・杜文鐸主編『簡明中国近代史』(福建人民出版社・一九八六年)
- 劉仁榮主編『中国革命簡史』(湖南大学出版社・一九八六年)
- 中共中央文献研究室『十一届三中全会以来重要文献選讀(上・下)』(人民出版社・北京・一九八七年)
- 同書編委会・編輯部『新聞工作手冊』(新華出版社・一九八五年)
- 人民網 <http://www.people.com.cn/GB/1018/22259/29796/index.html> (二〇〇四年十月)

王学文『中国伝媒結構と市場份額分析』

<http://www.studytimes.com.cn/chinese/zhuanli/2004whbg/504166.htm> (二〇〇四年十月)

日本語文献

布施茂芳『世界が注目した血の弾圧』(『新聞研究』一九八九年八月号)

高橋実『中国・天安門事件の「期待報道」』(『ジャーナリズム研究』一九八九年十月号)

読売新聞社中国特派員団『天安門燃ゆ——激動の北京現地報告』(読売新聞社・一九八九年)

山本賢二『中国の新聞の読み方』(大学書林・昭和六十二年「一九八七年」)

矢吹晋編著『天安門事件の真相(上・下)』(蒼蒼社・一九九〇年)

同 編訳『チャイナ・クライシス重要文献(第一・二巻)』(蒼蒼社・一九八九年)

胡繩著『中国近代史 一八四九〜一九二四』(原書『帝國主義与中国政治』人民出版社一九五五年/小野信爾等訳 平凡社選書・平凡社 一九七四年)

芝田稔・鳥井克之共訳『中国現代史——革命と建設の基本問題』(関西大学東西学術研究所・昭和六十二年/原書・馮玉忠主編『中国革命与建設の基本問題』遼寧人民出版社)

藤田正典編『中国共産党 新聞雑誌研究』(アジア経済研究所 一九七六年)

拙稿「中国の新聞紙面についての一考察——一九八九年四月〜六月の『人民日報』を中心に」(『専修大学人文科学研究月報』一五三号 一九九三年四月)